

四国大学紀要, (B) 34 : 47–52, 2012
 Bull. Shikoku Univ. (B) 34 : 47–52, 2012

小児看護技術演習においてグループ学習を効果的に 進めるための教育方法の検討

江口実希・小川佳代・中澤京子

Examination of an Educational Method for Group Learning in Pediatric Nursing

Miki EGUCHI, Kayo OGAWA and Kyoko NAKAZAWA

ABSTRACT

The purpose of the present study was to measure the effectiveness of discussion before and after each group practice for pediatric nursing.

A questionnaire survey was carried out with 75 college students, and the following results were obtained.

1. As a result of factor analysis using a discussion scale of 20 items, the following four factors were isolated. I. “Ability of speaking” II. “Ability of understanding” III. “Ability of listening” IV. “Ability of ironing out differences of opinions among groups”
2. The “Ability of speaking” scores after practice were significantly higher than the scores before practice.

The point of intramural seminars is to teach students how to set nursing goals and iron out the differences of opinions.

KEYWORDS : Pediatric Nursing Skill, Group Learning, Role play, Ability of discussion

はじめに

看護職にとって他者とのコミュニケーションは非常に重要である。なぜならば看護職は患者や同僚、他職種とのコミュニケーションにおいて業務が成り立っているからである。コミュニケーションの不足は、円滑な業務や、より良い人間関係（对患者、対同僚、対上司、対後輩等）を阻害する原因となりやすい。

しかしながら学生の時からコミュニケーションを苦手としている者も多く、病院実習では、コミュニケーション不足のため、必要な情報が不足し困惑するだけでなく、「患者や家族、病棟スタッフにどうやって話しかけたら良いか分からない」、「カンファレンスのときの話し方が分からない」等と訴える学生も多い。それらの学生は、特に日常のコミュニケーションの問題は見られておらず、友達などの仲の良い人同士では話をしたり、意見の交換をしたりすることに不便さは感じられないようである。では患者や看護職者とのコミュニケーションが上手にできな

いと感じる原因は何であるのかと考えた際に、効果的なコミュニケーションの調整不足が感じられた。

特に対象者が子どもとその家族である小児看護学では、対象者を配慮したコミュニケーションをとる必要があり、他の領域と異なる部分である。加えて児がまだ十分に自分の状況を看護者に伝える事の出来ない年齢である事が多く、家族との関わりの中からの情報収集も重要となり困難を覚える学生が増えている。

現在の少子化の波の中で子どもと触れ合う機会が減少したうえ、自らの生活体験の希薄な学生に、小児の特徴を理解した上で小児看護学領域に必要な看護技術の提供が出来るように教育するためには、学習活動の工夫が必要である¹⁾そこで、研究者らは小児看護技術演習で小児特有のアプローチ方法を学習するために、グループ学習や人形、DVDを用いた学習方式を取り入れた。人形やビデオを用いる演習は子どものイメージを持つ事に効果がある事²⁾や、グループでの作業やディスカッションを通して、人間関係形成能力を培うこともできる³⁾事が示されて

おり、教育効果が期待できる事が多数の文献に示されている。

加えて先行研究⁴⁾ではグループ演習後の振り返り評価が多く、演習前後のグループ学習の効果を評価したものは少なかった。

このことから、今回の研究は、技術演習における学習効果を高めるための教育方法の検討のために、グループ学習前後での学生の意見交換能力を分析し、効果的な教育方法における示唆を得ることを目的とした。

方 法

対象：A 大学看護学部看護学科2年次生81名で「小児看護方法論」（2単位）を履修した者を対象に、アンケート調査を行った。

調査期間：2010年4月～7月

倫理的配慮：演習前後に研究目的を口頭にて説明し、調査協力は自由意思で成績評価には何ら影響ないことと調査で得た個人情報の保護を文書及び口頭で説明し、書面で同意を得た。同意の得られた学生から演習終了後、調査用紙を回収した。

調査内容

先行研究⁴⁾を参考に「グループメンバーとの意見交換能力に関する質問（20項目）」を独自に作成し、質問用紙として用いた。質問項目における回答は「できる」「ややできる」「どちらでもない」「ややできない」「できない」の5段階とし、「できる」5点から「できない」1点の5段階リッカート尺度で得点化した。

分析方法

上記で使用した質問用紙を点数化し、平均値と標準偏差を求め、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。抽出された因子の平均得点を演習前後で比較し student t 検定を行った。統計ソフトは SPSS Statistics18を使用し、有意水準は5%とし

た。

グループ学習の演習方法

1) 実施内容

小児看護方法論2単位60時間の授業時間のうち、8時間をグループ演習にあてた。演習の内容は「バイタルサイン測定」「身体計測」「輸液」「吸引、吸入」「クベースの管理と看護」「経管栄養、調乳、離乳食」の6項目である。6項目全ての演習が終わった後に小児のバイタルサイン測定のロールプレイによる演習を2時間行い、さらに同内容についての実技試験を4時間（合計：演習10時間、実技試験4時間）行った。

それぞれの演習項目の到達目標は以下の通りである。

- a) バイタルサイン測定：乳児・幼児特有のバイタルサイン測定方法が理解でき、実施できる。
 - b) 身体計測：年齢にあった方法で身体測定を実施できる。
 - c) 輸液：小児特有の輸液投与方法が理解でき、輸液療法について児に説明が出きる。
 - d) 吸引、吸入：小児の吸引、吸入の特徴について理解できる。
 - e) クベース：クベースの管理、看護について理解できる。
 - f) 経管栄養、調乳、離乳食：小児と成人の栄養法の違いや薬剤の消化形態の違いの理解が出来る。調乳の正しい手順が分かる、離乳初期、中期、後期の時期による食品の違いや咀嚼方法の違いが理解できる。
- である。

2) 学生の学習状況

調査対象の学生は2年生であり小児看護概論0.5単位：15時間と小児保健論1単位：30時間の講義をすでに受講済みである。小児領域の病棟実習は未経験であるが上記の講義受講により、ある程度の小児看護の知識がある状態である。

3) 演習方法

演習では学生9～10名を1グループとし合計10グ

グループに分かれた。事前学習として事前学習用のプリントを用いた演習内容の予習と該当技術項目のDVD（演習内容に沿ったものを作成した）の視聴の後、教員のデモンストレーションにて演習内容を示し、グループ内で実際に演習を行ってもらった。

ロールプレイでは、小児のバイタルサイン測定の現場を想定し実施した。

まずはじめに、教員が患児役、看護師役、患児の母親役をロールプレイし、バイタルサイン測定を嫌がる児を想定した場面での、児へ対応、話し方、測定器具の工夫、母親への対応や説明などを示した。患児役の教員は「いやー、いやー」「こっちこんといて」と看護師や検温を嫌がる児を演じ1回のバイタルサイン測定が10分程度となるようにした。デモンストレーション後に学生はグループ毎に同様のロー

ルプレイを行った。

後日に児のバイタル測定について実技試験を行い試験の後に自己記入式の質問用紙にて自己評価を行った。

結 果

81名中同意の得られた76名のうち、グループ学習前後でのデータがある75名を分析対象とした（女性69名、男性6名）有効回答率92.5%であった。

グループメンバーとの意見交換能力に関する因子分析（固有値1.0以上、因子負荷量0.4以上）を行った結果、5因子が抽出された（表1）。

そのうち2項目は因子の絶対値の2項目間にわたる偏りが大きく（因子負荷量0.4以上）、2項目、1

表1 グループ学習法による意見交換能力項目因子分析結果

(n=75)

変数名	因子負荷量				
	I	II	III	IV	M (SD)
因子Ⅰ〈発言する能力〉					
・思ったことを発言する。	0.802	-0.063	0.086	0.272	3.44 (1.130)
・自信をもって意見を言う。	0.771	0.104	0.047	0.144	3.08 (1.024)
・相手が誰であっても反対意見を述べる。	0.763	-0.144	-0.094	0.095	2.81 (0.975)
・手際よく進める。	0.722	0.243	0.143	-0.134	2.68 (1.016)
・流れを素早く判断しながら参加者をリードする。	0.710	0.269	0.133	-0.292	2.41 (0.887)
・恥ずかしがらずに意見を言う。	0.698	0.036	0.096	0.043	2.87 (1.131)
・他者が納得できるような意見を述べる。	0.590	0.379	0.087	0.137	2.92 (0.784)
・疑問なことは質問できる。	0.573	0.295	0.129	0.255	2.97 (1.052)
・発言内容をうまく組み立てる。	0.475	0.299	0.076	0.131	2.84 (0.993)
因子Ⅱ〈内容を理解する能力〉					
・目的を理解している。	0.116	0.783	0.286	0.166	3.43 (0.857)
・終わったあとその内容をまとめる。	0.128	0.757	0.093	0.210	3.32 (0.808)
・要領よく記録できる。	0.121	0.723	0.065	0.111	3.04 (0.861)
・準備をして臨む。	0.018	0.655	0.207	-0.078	3.15 (0.881)
因子Ⅲ〈意見を聞く能力〉					
・他者の意見をよく聞く。	0.135	0.118	0.896	0.156	4.05 (0.868)
・他者の意見を尊重する。	-0.014	0.207	0.647	0.142	4.11 (0.746)
・相手の意見を相手の立場に立って聞く。	0.138	0.305	0.615	0.221	3.93 (0.827)
因子Ⅳ〈グループ調整能力〉					
・場の雰囲気を理解する。	0.174	0.110	0.285	0.726	3.88 (0.838)
・声の調子から相手の気持ちを読み取る。	0.113	0.244	0.290	0.513	3.57 (0.791)

因子抽出法：主因子

回転法：バリマックス法

因子を不適切とみなし削除した。残った18項目、4因子を、因子Ⅰ＜発言する能力＞（9項目）、因子Ⅱ＜内容を理解する能力＞（4項目）、因子Ⅲ＜意見を聞く能力＞（3項目）、因子Ⅳ＜グループ調整能力＞（2項目）に分類し命名した。

そのうち、グループ演習前後で各因子の平均得点で因子Ⅰ＜発言する能力＞に有意差（ $p=.006$ ）が見られた（表2）。

表2 各因子の演習前後の平均点の比較 (n=75)

	演習前 M(SD)	演習後 M(SD)	
因子Ⅰ ＜発言する能力＞	2.89(.74)	3.08(.80)	$P=.006$
因子Ⅱ ＜内容を理解する能力＞	3.23(.70)	3.39(.65)	ns
因子Ⅲ ＜意見を聞く能力＞	4.03(.69)	4.08(.65)	ns
因子Ⅳ ＜グループ調整能力＞	3.72(.72)	3.75(.62)	ns

t検定
 $P<.05$

考 察

グループ演習前後で因子Ⅰ＜発言する能力＞に有意差が見られた要因は「相手がだれであっても反対意見を述べる」「手順よく進める」「流れを素早く判断しながら参加者をリードする」「疑問な事は質問できる」の項目に大きな変化が見られたためだと考えられた。

特に、相手が誰であっても反対意見を述べられるようになったのは、グループ演習における学生の発言の態度を反映していると考えられ、グループ演習で活発に自分の意見を発言し、思っている事を他人に伝えられたと学生が認識したといえる。ロールプレイにおいて駄々をこねる患児役や母親役、看護師役を演じる事で、積極的な発言が促された事や、役割を与えられることで役割遂行のため積極的な演習の取り組みが図れた事、思っている事の表出しやすさ、発言する機会が講義形式の学習よりも増えた事が要因だと思われる。

反対に「手際良く進める」「流れを素早く判断しながら参加者をリードする」「疑問な事は質問できる」の項目は、演習の前後で平均点の減少がみられた。これらは演習でロールプレイを行う事により、自己のコミュニケーション能力やグループダイナミクスについての気付きがあったためではないかと考えられた。一般的にロールプレイでは、人と人とお互いに対応する場面を通して学習し、個々の行動変容が期待される。今回のグループ演習でも、相手の考えや感情の動きを掴む事や傾聴と共感の重要性に気付き、自発的で柔軟性のある行動がとれることが期待される課題であった。その体験を通して、自分の意見は述べられたと感じたにも関わらず、上記の得点が減少したのは、意見を訴えるだけではグループ演習が円滑に進まない事に学生が気付き、スキルの問題点に気付いた結果だと思われる。また、「手際よく進める」ためには、自分だけの役割に集中するのではなく、グループやクラス全体の進行状況を見ながら演習を進める必要がある。手際よく進めることが出来なかったということは、学生自身が周りのペースに合わせた演習をしようと努力した結果が表れたものだと考えられた。

「疑問な事は質問できる」も演習の前後の比較で評価点数が減少した。学生は演習で「相手がだれであっても反対意見を述べる」ことに、肯定的な評価を行っており、大きく評価が上昇していた。そのため、同様にこの項目の得点の上昇も予想したが、予測に反して減少していた。つまり、学生は反対意見について伝えることが出来るが、疑問なことについて質問することは十分でないと感じたことによる。

また相手の意見を聞くという項目の中では「内容を聞く能力」の得点が高かったが、「他者の意見をよく聞く」「他者の意見を尊重する」「相手の意見を相手の立場に立って聞く」は演習前から得点が高く、受身的な学生の演習に対する姿勢が反映されたのではないかと考えられた。演習前後の比較で、有意差は見られなかったが、全体の平均値は演習後にさらに上昇がみられた。一般にディスカッション場面で日本人が得意と思っており、巧く使えると認識

しているスキルは、他者の話を聞くという傾聴に関するスキル、他者の状態や気持ちを察するスキル⁴⁾であると示されており、文献と類似した結果となった。しかしディスカッションにおいて重要な事は「人の話を聞く、メンバーに話を振る、相手の意見に賛成する、グループメンバーと協力する、グループを調整する」ということであり、これらが欠けると十分な、又は効果的なディスカッションを行う事が難しい。分析結果では人の意見を聞く事が出来ると認識しているが、質問をすることや、スムーズに課題をこなす事は不得意であると示されている。これらはグループメンバーの意見をしっかりと聴く事が出来ていない為に、疑問に思った事を質問する事が出来ず、意見を言ったつもりでも、反対意見を述べるに留まってしまう傾向が読み取れる。また自分とグループメンバーとの考えが違うときに、意見の調整が不十分であり、メンバーとの作業の調節や意見交換が上手に行えないため、「手際よく進める」といった項目も得点が減少したとののではないかと考えられた。

傾聴とは、『こちらの聞きたいこと』を「聞く」(hear)のではなく、『相手の言いたいこと、伝えたいこと願っていること』を受容的・共感的態度で『聴く』(listen)ことであり、相手が自分自身の考えを整理し、納得のいく結論や判断に到達するように支援することである。つまり、『聴く』の字の如く、『耳と目と心で聞く』のが『傾聴』の基本である⁵⁾。聞く能力(傾聴の姿勢)は得意だと自負しているが、これらの事を加味すると、相手の話を聞く事が十分に行えておらず、また話を聞くとはどのような事かについての理解も不十分であると言える。相手の意見をしっかりと聴く事はコミュニケーションの上で大変重要であり、しっかりとした認識を促す必要がある。

「グループでの演習を手際よく進める事が出来なかった」「参加者をリードできなかった」と学生が感じていたこともコミュニケーション技術の問題から生じるグループ調整能力の不足であると考えられる。一方通行の意見を伝えるだけではなく、意見を討議に持っていけるようなコミュニケーション、グルー

プ調整能力の向上が今後の課題である。これらを促すために、グループ演習に教員が加わり、課題に対する現在の進行状況や問題点、ポイントなどについて助言し、お互いの意見や演習内容の理解を促すことが重要だと考えられた。

学習の方向付けを行うことで「学生たちは資料収集とその根拠を明らかにするために多くの文献・ビデオを活用できる」³⁾そのためには学生の技術演習に対する興味や関心、演習における集中力をいかに継続させるかが課題である。『何をどうすればいいのか』と疑問を持ち、自ら考えたり、『調べる』『質問する』などの解決行動が取れるようになる学習の具体的な方向付けも重要である。

結 論

グループ演習前後でのディスカッション能力を分析した結果、以下の事が分かった。

1) 20の質問項目より4因子を抽出し、因子Ⅰ<発言する能力>、因子Ⅱ<内容を理解する能力>、因子Ⅲ<意見を聞く能力>、因子Ⅳ<グループ調整能力>と分類した。

2) グループ演習前後で因子Ⅰ<発言する能力>に有意差($p=.006$)が見られた。

今後の展開と課題

さらに効果的な学習効果を得るために、学生に技術演習の課題をしっかりと意識付けさせることが必要である。そのためには学生の学習意欲を引き出しながら、自主的に学習に取り組みが出来るようなアプローチ方法の検討を行う必要がある。

因子の抽出において、因子ごとの項目数に大きな偏りが生じる結果となった。項目間の因子負荷量の分布が2か所に凝集している項目もあり、質問方法を考慮する事が今後の課題と思われる。

学生に対し齟齬なく内容が伝わるよう、質問用紙項目の再検討をする必要がある。

引用文献

- 1) 中新美保子 (2004) 自己教育力育成を意図した小児看護技術演習の試み quality nursing vol.10 no.5
- 2) 山村美枝 (1998) 看護系大学における小児看護学の技術演習と今後の展望 Quality Nursing
- 3) 川嶋 麻子 (2005) 基礎看護学領域における看護実践能力の育成に向けた演習の試みと課題ー看護基本技術の習得に向けてー 山口県立大学看護学部紀要 第9号
- 4) 安永 悟 (1998) ディスカッションスキル尺度の開発 久留米大学文学部紀要 人間科学科第12・13号
- 5) 医療と福祉の用語集・辞典 <http://www.akanekai.jp/hitokuchi.htm>